編集長から

人間の命を削り取っていく社会

増田　一世

2002年10月17～18日，熊本市においてセルプ協の主催する福祉工場部会に出席した．

福祉工場は，身体障害者，知的障害者，精神障害者の順に整備されてきており，後発の精神障害者福祉工場は，先輩たちの福祉工場経営に学ぶところが多い．

１年ぶりに出席したが，経営の厳しさを訴える先輩たちが多く，日本の経済不況を肌で感じた．障害者に高い工賃を保障することを検討する分科会で，ダイア磯子（社会福祉法人同愛会）の職員東海理恵さんの報告から，私たちを取り囲む労働環境の厳しさが迫ってきた．この福祉工場は，1992年に設置された知的障害者の福祉工場で，現在38名の方がホテルのリネンのクリーニングの仕事に従事している．知的障害者の福祉工場では，最低賃金保障除外申請をする場合があるが，この工場では，時給706円，１日5,000円，１か月約15万円の賃金で障害者を雇用している．東海さんの話によると，発注先のリネンの会社はダイヤ磯子だけではなく，外国人の不法就労者を雇っている事業所にも仕事を下ろしている．労働法を守りつつも１年365日フル稼働で，すべてがぎりぎりなところで運営しているダイヤ磯子，一方24時間操業，安い人件費で運営している事業所にはコストの面では太刀打ちできない．強力なライバルの登場により，単価の値下げを要求され，経費の削減をぎりぎり努力し，半期は何とか黒字で凌いだが，この先の見通しは大変厳しいという．受注先も厳しい状況の中での選択なのであろう．その皺寄せは，障害者と職員にずっしりと重くのしかかっているのである．

そして数日後，京都の精神科医遠山照彦さんから１通のメールが届いた．過労自殺の裁判など労災裁判の意見書を6通も書かれたとのこと．今年は，過労自殺の労災認定件数がすでに20件を超え，昨年の31件を超えることは確実とあった．「人間の命が削り取られていっている，いったいこの国の労働状況はどうなっているのか．まさに狂気的状況にあります」と締めくくってあった．

数年前，研修で訪れた職業安定所の職員が「働くことは苦行です」という感想を残された．私にとっては，やどかりの里で働くことは「自分を成長させること」であった．もちろん生活のためという側面も無視できないが，人間として大切にされ，メンバーや職員に育ててもらったという実感がある．やどかり情報館（福祉工場，やどかり出版は福祉工場の１つの事業である）は働く１人１人が成長できる事業所でありたい．そして，やどかりの里はともに育ち合える場所でありたい．そんな思いで20数年間働いてきたが，これはとても恵まれた環境なのだと改めて思う．しかし，人間が成長できる労働現場を実現せずに，人間の命を削り取っていく社会に本当の発展はあるのだろうか．

労働現場の厳しい状況から，今の社会のひずみや歪みが浮かび上がってくる．このひずみや歪みをどう捉え，問題を見据えていくのか．私たち１人１人が腹を据えて真剣に考えなくてはいけない切羽詰ったところに押し込まれているように思うのは，私だけだろうか．